

2001年度 第2回研究集会報告

平成13年10月21日(日)、2001年度第2回研究集会がはじめて四国の地、香川大学研究交流棟にて開催された。テーマは第1回研究集会に引き続き、「これからのバレーボールを考えるーその2(現場からの提言)」で、全日本ジュニア男子監督の池田長廣氏、前仲南町立仲南中学校教諭の亀山正昭氏、牟礼町立牟礼中学校教諭の長曾絹代氏をシンポジストに迎え、それぞれの立場から、現場の取り組みと課題について熱心に議論が展開された。その概要を報告致します。

(企画委員 中瀬巳紀生)

「ジュニア期の選手をどう伸ばしていくか？」

池田 長廣氏(全日本ジュニア男子監督)



平成3年にユース男子の監督を務め、ブラジルに次いで銀メダルを獲得、平成5年には銅メダルでした。日本の高校生は世界においても非常に高いレベルにあります。しかしながらユースではメダルを取りながら、ここ8年間、ジュニアではアジア予選を突破できない状況が続いていました。国内では少子化に伴って中学、高校生のバレー競技人口が著しく減ってきています。女子の競技人口についてもソフトボールのオリンピックでの活躍などにより、バレーボールは完全に取り残された状態にあります。高校を定年退職してからは強化担当の立場から、なんとかしてこの状況を立て直す方法を考えていました。小学校、中学校、高校、大学、ジュニア、シニアの指導者が一貫性のある指導をしなければいけないと常々考えていました。

そこで全日本Bチームという組織を作って、シニアと同じ舞台で競争することを考えたわけです。それが認められて中学生からは身長が190cm以上の選手を、また、高校、大学からは身長が2m近くで最高到達点が3m40cm程度の選手を合わせて30名ほど選び、一昨年の12月に合宿を行いました。その合宿に指導者として田中幹保氏に来て頂いたわけです。さらに大学、高校、中学の指導者が一同に集まって話し合い、とにかくこのシステムを続けていこうということになりました。その選手たちが、現在田中幹保氏率いるシニアチームに8割くらいいます。荒削りではありますが、将来楽しみな選手たちが現在シニアで頑張っています。田中氏のシニア監督就任で私がジュニア男子を引き受けることになったのですが、8年ぶりに予選を突破できたのはメンタル日誌をつけさせ、選手の状態を把握できたことが大きな要因のひとつになっています。

バレーボール選手育成の上で「選手・環境・指導者」の3つのバランスが大事であると考えます。勝たないと選手

は集まりませんが、ジュニアの調査ではバレーを始めた動機として「親、兄弟がバレーをしている」「背が高くて引っ張られた」という傾向が見られました。2年前にユースで特別枠として連れて行った柰田という選手は身長が2m1cm、指高が2m73cmあります。高校の先生のご理解もあって、この選手を長い目でみて使い続けました。今回の世界選手権ではこの選手が大活躍して韓国に3-0で勝ちました。続くイタリア戦ではジャンプサーブにやられ1-3、ウクライナには3-1で勝ち、予選グループ2位で決勝トーナメント進出を決めました。予選グループ終了時点で世界の強豪チームを含め柰田がブロック1位、北島がスパイク部門2位。また、セッターの阿部は左利きの191cmであり、世界に出て活躍できる人材はいます。現在も各都道府県協会に協力してもらって優秀選手発掘委員会による大型の選手集めをしています。

環境という面から見ると、中国の選手はナショナルチームの選手になれば、一生保障されます。韓国では高校が25チームしかなく、その中でベスト4に入れば無条件で大学に進学でき、金銭面でも保障されます。しかし、日本では7000以上もの登録チーム数(高校)があるにもかかわらず、勝っても何の保障もありません。この点で選手の取り組み方が大きく違ってきます。

今回、監督を引き受けたときに、東京で各大学の監督方に集まっていただき、いつだったら選手を出していただけるのかを確認し、協力してもらい何度も合宿を行いました。スケジュール的には厳しい者もいましたが、結果として全員そろって練習ができ、7ヶ月で75日合宿をさせてもらいました。練習をしっかりとする環境が作れば、充分世界でも通用するチームが作れると思います。問題は指導者が目を上に向けず、ナショナルチームに選手を出さないところがあることです。

今回のジュニアチームはトレーニング面とメンタル面での強化をしっかりと行ったのでイスラマバードで行われたアジア選手権でも40度の暑さに屈することなく戦うことができました。韓国とサウジアラビアにはフルセットの末、惜敗しましたが、第3位で予選を通過しました。世界選手権ではベスト8決めのプレーオフでセッター阿部が捻挫してしまいアルゼンチンに1-3で敗れ、第9位という

成績に終わりましたが、それ以上を狙えるチームであったと思います。ジュニアを見ても世界に2mを超える選手がたくさんいます。これらの選手が数年後にはナショナルチーム代表として活躍することは容易に想像できます。日本もオリンピックや世界選手権でメダルを取る可能性はあると思いますが、そのためにはやはり各世代各レベルの監督が上を見て、選手を積極的に世界に出していただきたいと思います。

「香川県における実践

—中学校男子の指導育成における創意と工夫—

亀山正昭氏（前・仲南町立仲南中学校）

最初に赴任した岡山県の中学校で顧問になったのがバレーボールとの出会いで、以後37年間バレーボールの指導に携わってきました。一番長く勤めた仲南中学校は町民5千人足らずという小さな町の学校で、全校生徒180人で部活動は剣道、卓球、バレーボールの3つだけです。素人の自分でできるチーム作りを考え、指導においては生徒のいい面を出すことを心がけました。地域、学校、保護者の理解と協力、選手の体力、精神力、そして指導者の熱意、これらの総和が競技力となると考えています。中学校の場合、保護者の協力が何より大切で、「バレーをさせていて大丈夫か?」「勉強ができなくなるのではないか」といった保護者の不安を取り除くため、教室にいるときから部員の学習指導、生活指導を重視し、バレーボールが生徒のプラスになることを保護者に理解して頂くようにしました。また、能力の差はあっても毎年のチームを大事に育てることが大切だと感じています。仲南町はバレーボールが大変盛んで、町民に理解があり環境に恵まれています。年に1回町民バレーボール大会があり、20面ものコートに180チームも参加して行われるほどです。また、町内に部活動後

援会があって、集めた会費を部費として使わせてもらうことができました。

バレーボールというスポーツを通して「体と心を磨く、鍛える」ことを目指しました。バレーをしているときはもちろん、授業のときも全力で集中することが大事だと考えます。そして何よりもマナー、マナーがよくないチームは勝てません。マナーを徹底することでチームワークが高まり全員バレーにつながります。練習においては基本練習を何よりも重視しました。サーブとレシーブ（パス）ができないのは指導者の責任と考えます。中学生においては基本、守備練習の重視が精神力の強化にもつながります。合宿は年に2、3回行いますが、このときに純粋なOBで構成された仲南町体協チームの協力、指導も勝つための大きな要因でした。また、県外遠征では他校の監督と夜中遅くまでバレー談義をし、得ることがたくさんありました。

指導者として、バレーボール部の監督である前に学校の教職員の一人であり、学校経営に参加することは同僚の理解を得るために必要なことだと考えます。監督の仕事としては、個々の選手の長所を見出し、その年のチームの特色を作ることが先決で、どんなチームでもあきらめないことです。子供の成長はゆっくり、着実であると考え、一度に多くのことを要求せず、進歩の段階を大切に捉えます。「叱って潰す」より「褒めて伸ばす」ことのほうが大事だと考えます。また、他チームの指導者から学んだり、専門書、指導ビデオをみるなど日々研究、特に指導ノートを作って、感じたこと、気づいたことをタイムリーに書く習慣をつけていました。バレーボール、生徒を好きでないとバレーボールの指導者は務まらないと考えます。

最後に、今思えば自分が一番できなかったことですが、家族の理解を得ることが大事なことと思います。家族の支えがあって指導ができるわけですから、家族サービスをすることも必要なことだと思います。



「香川県における実践

—中学校女子の指導育成における創意と工夫—

長曾絹代氏 (牟礼町立牟礼中学校)



私自身は、小さいときに母親が行く週一回のママさんバレーについて行ってもバレーの魅力は何も感じませんでした。小学校のときに見たアタックNO.1やサインはVなどの漫画、ミュンヘンへの道などに大きな影響

を受けました。漫画の影響というのは子供たちに大きなきっかけを与えたいと思います。その後、バレーを始めるようになってから中学、高校、大学とたくさんの恩師の方々との出会いがありました。赴任した当時の香川一中は県下でも五本の指に入るほどの校内暴力のひどい荒れた学校でした。そこで、「このエネルギーを何とかしてスポーツで燃焼させよう」と放課後の指導に取り組みました。「勝てるための特効薬などない。能力が高なくても毎日の積み重ねこそが大切だ」ということを学びました。県で優勝するにしても、続けることが大事です。選手がよいときには誰でも勝てます。それを続けることが大事で、それが指導者の本当の力だと教わりました。だから、どんな選手の時にも辛抱して付き合っています。今もその気持ちに変わりはありません。

中学校の部活動で目指していることは教育的運営であり、バレーボールを通して何を教え、学ばせるのか、これを一番大事に思っています。目的は人間形成です。部活だけでなく、あらゆる場所で活躍し、周りの人から感謝、支援、愛される子供を育てていきたいと思っています。ものすごくエネルギーが必要なことですが、強くなるためには、意識を変えることが大切です。バレーの技術、体力、精神力よりもまずバレーに対する姿勢が大事で、意識を変えてもらうために何度も子供たちと話し合いました。

指導者として心がけていることですが、限られた選手の癖や個性を見出し、個の持っているマイナス面をプラス面でカバーできるチーム作りをえています。練習は夏に勝つための体作りと基礎、基本の反復練習に重点を置いています。いくら気持ちがあっても体がついてこなければ暑い夏には勝てないということを選手に理解してもらい、目的意識を持って取り組むようにしています。

女子では、スピーデイでリズムのある練習が必要です。練習のパターンが決まると、私はマシンのようにボールを出します。気迫とか緊張感というムードは怪我の防止にもつながります。ボール渡しのタイミングも大切で、遅ければボール拾いのほうを怒ることもあります。床拭きがさつとやれない、気配りができない、などのことがないように配慮をして、スピーデイに練習できるよう周りの子も緊迫感を持ってできるような雰囲気作りを大切にしています。

技術面ではどこのチームも変わらない。精神面の強化が必要だと感じます。女の子はずるがしこく打算的で力を抜くことがあります。故山田元全日本監督が言われていたように「妊娠のときの気張る力をいかに持続させるか」が女子の指導に必要なことだと思います。闘争心、高揚する気持ちを出させるためにはライバルを見つけることです。「あのチームには負けたくない」「あのチームのこのポジションの選手には負けたくない」「自分自身の弱いところに負けたくない」という三つのライバルを持つことが大事です。それから、勝つための執着心、こだわりです。このボールをあげるんだ、決めるんだという気持ちです。失敗が重なると逃げの姿勢をとる子もいます。時には追い込む練習も必要かと思えます。それが忍耐力をつけると思えます。

価値観が多様化する現在、一番頭の痛いところが環境作り、保護者の理解です。自分は懸命に子供たちと付き合っているんだという姿を保護者に理解してもらうことが大事です。年に二回、新入生入学時と新チーム結成時には保護者会を開いて保護者の理解と協力を得るようにしています。